

各科活動報告

集中治療科

担当医

○北山 仁士(集中治療科部長)

認定資格：日本外科学会外科専門医・指導医／三学会構成心臓血管外科専門医・修練指導者／臨床研修指導医／医学博士／近畿大学心臓血管外科客員教授／堺市難病指定医

○吉川 健治(集中治療科医長)

認定資格：日本外科学会外科専門医／日本がん治療認定医機構がん治療認定医

○河村 智宏(消化器内科医長)

認定資格：日本内科学会内科指導医／日本消化器内視鏡学会消化器内視鏡専門医／臨床研修指導医／日本救急医学会ICLSインストラクター

○杉山 円(麻酔科医長)

認定資格：麻酔科標榜医／日本麻酔科学会麻酔科専門医・指導医／日本専門医機構認定麻酔科専門医／日本心臓血管麻酔学会心臓血管麻酔専門医／臨床研修指導医

活動報告

ICUは全科の集中治療を担うgeneral ICUとして、人工呼吸器、IABP、PCPS(ECMO)等の生命維持装置を駆使した呼吸・循環管理、血液浄化療法による体液管理から、代謝・栄養管理まで、標準かつ最先端のICU管理を行っています。

ICU滞在中はICU担当医が、他職種とともにチームとして質の良い集中治療を提供しています。

専任医師に加え、心臓血管外科、循環器内科、呼吸器内科、麻酔科の協力のもと、看護師のみでなく、薬剤師、栄養師、理学療法士、臨床工学技士と、ICUの治療に関与する全ての職種が積極的に関わり、理想的なチーム医療を実践しています。

手術室、救急外来、一般病棟から最重症で集中治療を要する患者さんを受け入れ、今年度も稼働率は99%を維持しました。重症が重なり、時にはICU、HCUの8床全てに人工呼吸器管理を要することや、ICUにPCPSが2台並ぶこともありました。

ECPRについては、本年度も、主に急性心筋梗塞に起因する心停止に対するECPR症例が多数有りましたが、4例でPCPS(VA-ECMO)の離脱を完遂し、2例が生存退院されました。

今後の展望と課題

以前から入室患者担当主科との連携強化をアピールしており、少しの改善傾向は認められますが、まだ、特にHCU入室例については不十分と思われます。本来のチーム医療実践のためには、更に協力要請が必要であると思います。

総合診療センター

担当医

○藤本 卓司(救急総合診療科部長)

認定資格：ICD(Infection Control Doctor)／麻酔科標榜医／京都大学医学部臨床教授／臨床研修指導医／堺市難病指定医

○大矢 亮(副病院長 兼 総合診療センター長 兼 救急総合診療科部長)

認定資格：日本内科学会総合内科専門医・指導医JMECCインストラクター／日本プライマリ・ケア連合学会指導医／SDH検討委員会委員／日本病院総合診療医学会認定総合特任指導医／日本専門医機構総合診療専門医・総合診療専門研修特任指導医／日本救急医学会ICLSディレクター・インストラクター／ACLS大阪認定ディレクター・認定インストラクター／臨床研修指導医／臨床研修プログラム責任者／日本静脈経腸栄養学会TNT研修会修了／日本老年医学会高齢者医療研修会修了／HANDS-FDF2014修了／認知症サポート医／日本HPHネットワーク運営委員／堺市難病指定医／大阪医科薬科大学臨床准教授

○藤本 翼(救急総合診療科医長)

認定資格：日本内科学会総合内科専門医／日本専門医機構総合診療専門研修特任指導医／ACLS大阪認定インストラクター／臨床研修指導医／堺市難病指定医／日本静脈経腸栄養学会TNT研修会修了

○井上 剛(救急総合診療科医長)(~2023.9)

認定資格：日本救急医学会救急科専門医

○杉本 雪乃(救急総合診療科医長)

認定資格：日本内科学会総合内科専門医・指導医／日本専門医機構総合診療専門研修特任指導医／JMECCインスト

ラクター／日本救急医学会ICLS認定ディレクター／ACLS大阪認定ディレクター・認定インストラクター／JPTECプロバイダー／臨床研修指導医／日本静脈経腸栄養学会TNT研修会修了／HANDS-FDF2011修了

○河村 裕美(救急総合診療科医長)

認定資格：日本内科学会総合内科専門医・指導医／日本専門医機構総合診療専門研修特任指導医／JMECCインストラクター／日本救急医学会ICLSインストラクター／臨床研修指導医／日本静脈経腸栄養学会TNT研修会修了

○松浦 由佳(救急総合診療科医長)(2024.1～)

認定資格：日本内科学会総合内科専門医／日本呼吸器学会呼吸器専門医／日本呼吸器内視鏡学会気管支鏡専門医

○瀬戸 司(小児科医長)

認定資格：日本小児科学会小児科専門医／臨床研修指導医／臨床研修プログラム責任者

○松瀬 房子

認定資格：日本内科学会認定内科医／認知症サポート医／社会福祉士／NST医師教育セミナー修了

○山口 諒也

認定資格：日本内科学会内科専門医

○河村 勇志

認定資格：日本内科学会内科専門医

活動報告

医師体制は内科専門研修を修了した後期研修医1名がそのままスタッフ医師として加わり、さらに当院で初期研修を修了したあと他院内科専門研修を修了した医師1名がスタッフ医師として戻って来てくれた。10月～12月には医師1名を受け入れることができ、病棟スタッフ数はこれまでで最も多い体制となった。担当入院患者数は前年度529名から678名と増加した。教育面では延べ人数で13人の初期研修医、4人の後期研修医、4人のクリニカルクラークシップ医学生を受け入れた。

ERスタッフは2022年4月に着任した救急専門医が9月に退職したが入れ替わりで医師1名が着任し、ERの医師体制は他科の協力も得ながら維持することができた。新型コロナウイルス感染症は5月8日に5類感染症に移行したが、夏と冬の流行と救急ひっ迫は依然として継続した。これまでと同様に比較的軽症の患者は下り搬送で近隣病院に転送することでできるだけ応需できる体制を維持できるように取り組んだ。その結果2023年度も昨年度と同水準の7,559人の救急搬送を応需することができた。

今後の展望と課題

2024年4月に育児休暇を取得していた医師1名が復帰する。まずは仕事をしながら育児をするペースをつかむことを優先してもらい、慣れながら病棟における教育に力を発揮してもらうことを期待している。一方で8月には医師1名が退職のため、それまでにこれまで以上に他診療科の協力を得てERにおける診療と教育の維持・発展に努めたい。5月31日に救急診療と教育の指導を目的に招聘した塩田病院青木信也医師を継続して招聘することとで、診療と教育のレベルアップと一貫性の構築を目指していく。

また2024年度は5年ぶりに総合診療専門医プログラムの専攻医を受け入れることができた。これから継続して受け入れができるように、総合診療専門医プログラムの充実と来年度以降の専攻医獲得に向けたリクルートに取り組む。

最後に4月から働き方改革が始まり、6月には診療報酬改定が実施される。いずれも対応が大きな変革となり対応が求められるため、その中でチームとして求められる役割を発揮していきたい。

循環器センター(循環器内科)

担当医

○石原 昭三(副病院長 兼 循環器センター長)

認定資格：日本内科学会認定内科医総合内科専門医・指導医／日本循環器学会循環器専門医・指導医／日本心血管インターベンション治療学会専門医・施設代表医／臨床研修指導医／堺市難病指定医／植え込み型除細動器(ICD)・ペーシングによる心不全治療(CRT)研修修了／堺市身体障害者福祉法指定医師(心臓機能障害)

○具 滋樹(循環器内科医長)

認定資格：日本内科学会認定内科医／日本循環器学会循環器専門医・指導医／臨床研修指導医／心臓リハビリテーション指導士／植え込み型除細動器(ICD)・ペーシングによる心不全治療(CRT)研修修了／堺市身体障害者福祉法指定医師(心臓機能障害)／堺市難病指定医

○橋本 朋美(循環器内科医長)

認定資格：日本内科学会認定内科医総合内科専門医・指導医／日本循環器学会循環器専門医／日本心血管インターベンション治療学会認定医／日本高血圧学会専門医・指導医／植え込み型除細動器(ICD)・ペーシングによる心不全治療(CRT)研修修了／堺市身体障害者福祉法指定医師(心臓機能障害)／臨床研修指導医／堺市難

病指定医／NST医師教育セミナー修了

○鷺見宗一郎(循環器内科医長)

認定資格：日本内科学会認定内科医

○南里 直実

認定資格：日本内科学会内科専門医

○成田 亮紀

認定資格：日本内科学会内科専門医

活動報告

2023年はPCI 651件(うち緊急PCI 196件)、アブレーション139件、PTA 91件であった。医師1名が退職するも、複数の若手医師を迎え入れることができ、症例数を維持、増加させることができた。

今後の展望と課題

1) カテーテル治療のさらなる発展

PCI症例数は頭打ちと考えられるが、アブレーション、EVTはまだまだ伸びしろがある。

予定症例の治療中で緊急を要する症例が待機せざるを得ない状況も発生している。また終了時刻が遅くなることからスタッフの負担も大きくなっているため、カテ室の増室が急務である。

2) 不整脈学会専門研修施設認定の取得

専門医取得により、2025年度からの施設認定に向けて準備中である。

3) structural heart diseaseへの対応

カテーテルによる弁膜症治療(TAVIなど)が普及しており、高齢者の心不全治療を考える上で将来的には当院でも実施できることが求められる。ハイブリッドオペ室の導入と、心臓外科手術症例数の増加が今後も循環器診療を継続していく上での必須課題である。

● 循環器センター(心臓血管外科)

担当医

○井上 剛裕(心臓血管外科主任部長)

認定資格：日本胸外科学会認定医／日本外科学会外科専門医／三学会構成心臓血管外科専門医・指導医／堺市身体障害者福祉法指定医師(心臓機能障害)／堺市難病指定医

○金田 敏夫(心臓血管外科部長)

認定資格：日本外科学会専門医・指導医／日本循環器学会循環器専門医／三学会構成心臓血管外科専門医・指導医／臨床研修指導医

活動報告

2023年度における心臓血管外科手術の症例数は、前年と大きな変動なく行いました。周囲施設との連携や、他院からの術後リハビリ目的入院受け入れも一定数あり、患者さんは社会生活に復帰しています。地域連携部門・サポートチーム・病棟の医療スタッフは、矜持をもって日々協働し、医療サポートも円滑に行っていました。

ウィズコロナからアフターコロナへ転換のなかで、依然として外科診療においても、感染対策の継続的な努力が求められています。当診療科も幸い不具合なく、術前からの周術期管理を安全に行い、退院、ご紹介いただいた病院へシームレスにつなげられました。

一般社団法人NCDが実施するデータベース事業及び、日本成人心臓血管外科手術データベース(JCVSD)に継続参加しています。

今後の展望と課題

早期回復、在院日数の短縮、術後に生活の質を良好に維持できるように、手術の低侵襲ニーズは大きくなっています。当院も、弁膜症に対する低侵襲手術としてのMICS治療が始まり、弁膜症手術の治療選択肢が、幅広くなることが期待されます。血管治療の低侵襲化も望ましく、ステントグラフト治療(EVAR)の導入を、すすめています。

長寿化、超高齢化が進むなかで循環器疾患は、家族の介護負担が必要となる比率が高く、医療費が最もかかるため、その対策強化は重要な課題です。ご家族の介護も難しいことが多く、外来受診から予防的に行うことで介護負担を少なくし、患者さんのご負担の軽減、医療費の効率化や低減に貢献できればと考えています。

パンデミックがもたらした新しい医療環境のなか、人口減少、少子高齢化、医療ニーズの変化が進み、価値観の相違や権利意識が更に強くなっています。エビデンスに基づく医学情報、手術治療の提案、患者さんやご家族さんの価値観、意向、懸念を共有し、循環器治療を計画していきます。医療新時代の変化に応じた地域病院として、患者さんご家族、医療スタッフを含めた対話を重視した心臓血管外科治療を行っています。

● 消化器センター

担当医

○山口 拓也(副病院長 兼 消化器センター長)

認定資格：日本外科学会外科専門医・指導医／日本内視鏡外科学会技術認定医／日本消化器内視鏡学会消化器内視鏡専門医／日本消化器外科学会消化器外科専門医・消化器がん外科治療認定医／日本がん治療認定医機構がん治療認定医／手術支援ロボットda Vinci術者認定／臨床研修指導医／堺市難病指定医

○岩谷 太平(消化器内科部長)

認定資格：日本内科学会総合内科専門医・指導医／日本消化器内視鏡学会消化器内視鏡専門医・指導医／日本消化器病学会消化器病専門医／日本がん治療認定医機構がん治療認定医／臨床研修指導医／堺市難病指定医

○松田 友彦(消化器内科医長)

認定資格：日本内科学会総合内科専門医・指導医／臨床研修指導医

○河村 智宏(消化器内科医長)

認定資格：日本内科学会内科指導医／日本消化器内視鏡学会消化器内視鏡専門医／臨床研修指導医／日本救急医学会ICLSインストラクター

○吉川 健治(肝胆膵外科部長)

認定資格：日本外科学会外科専門医／日本がん治療認定医機構がん治療認定医／堺市身体障害者福祉法指定医師(肝臓機能障害)

○戸口 景介(外科部長)

認定資格：日本外科学会外科専門医・指導医／日本がん治療認定医機構がん治療認定医／厚生労働省認可麻酔科標榜医／日本消化器内視鏡学会消化器内視鏡専門医・指導医／日本消化器外科学会消化器外科専門医・指導医・消化器がん外科治療認定医／日本ヘリコバクター学会H.Pylori(ピロリ菌)感染症認定医／日本腹部救急医学会腹部救急認定医／麻酔科標榜医／堺市難病指定医

○外山 和隆(副病院長 兼 外科部長)

認定資格：日本外科学会外科専門医／日本がん治療認定医機構がん治療認定医／臨床研修指導医／堺市難病指定医

○中江 史朗(腫瘍内科部長)

認定資格：日本外科学会外科専門医・指導医／日本消化器外科学会消化器外科専門医・指導医／日本消化器内視鏡学会消化器内視鏡専門医／日本大腸肛門学会専門医・指導医／日本消化器病学会専門医／日本東洋医学会漢方専門医／日本臨床腫瘍学会がん薬物療法専門医・指導医／日本がん治療認定医機構がん治療認定医／臨床研修指導医／医学博士

○中川 朋(消化器外科医長)

認定資格：日本外科学会外科専門医・指導医／日本消化器外科学会消化器外科専門医・指導医・消化器がん外科治療認定医／日本がん治療認定医機構がん治療認定医／臨床研修指導医

○今井 稔(消化器外科医長)

認定資格：日本外科学会外科専門医／手術支援ロボットda Vinci助手認定／臨床研修指導医／堺市難病指定医

○土居 桃子

認定資格：日本外科学会外科専門医／日本消化器外科学会消化器外科専門医・指導医

○櫻井 史歩

認定資格：日本内科学会総合内科専門医・指導医／臨床研修指導医

○池田 響

○平林 邦昭

認定資格：日本外科学会外科専門医・指導医／臨床研修指導医／堺市身体障害者福祉法指定医師(小腸機能障害)(膀胱又は直腸機能障害)／堺市難病指定医

○岡田 正博

認定資格：日本消化器内視鏡学会消化器内視鏡専門医／堺市身体障害者福祉法指定医師(肝臓機能障害)／堺市難病指定医

○坂本 祥大(~2024.6)

○深野耕太郎(後期研修医)

○花川 傑(後期研修医)

活動報告

消化器センター(内科)は上部、下部消化管の出血に対しては24時間365日緊急対応する体制を敷き、コロナ禍以降も治療数は維持されており堺市内の医療向上に寄与しました。悪性疾患等による消化管閉塞に対してはステント治療を広く取り入れ、速やかな手術療法への移行を行い低侵襲な治療を可能にしています。胆道系疾患に対する定期、緊急ERCPも数年間過去最高記録を更新し続けています。

消化器センター(外科)では消化管外科、乳腺外科、ヘルニア外科などを主に行いました。消化管及びヘルニア外科では、その多くを腹腔鏡下に行っています。直腸癌に対しては手術支援ロボットシステム(da Vinci)や集学的治療を取り入れています。前方手術のみならず、経肛門アプローチを用いTPE症例(TaTPE)でも可能な症例には肛門温存を行なっています。2023年度には巨大食道裂孔ヘルニアに対する腹腔鏡下根治術も施行し良好な経過を得ました。乳腺領域では全国統計と同様に乳がんの諸例数が伸びています。2023年度は地域ニーズに応えるべく外科緊急症例が250例を超えました。

今後の展望と課題

- 1) がん診療をさらに充実させ、いよいよ集学的治療、2期工事を行い放射線治療導入を行って参ります。ロボット手術の適応拡大を行います。
- 2) 高度専門的な治療を拡充し専門スタッフの更なるスキルアップを行い患者さん満足度の高い医療を提供して参ります。
- 3) 全職種横断的な総合カンファレンスを毎週開催し、より一層、患者さんやご家族の想いを充分かなえられるような治療をチームで提案します。
- 4) 上部、下部消化管、肝胆脾分野ごとのエキスパートの育成を行い、患者さんにさらに質の高い治療を提供しつづける努力を継続して参ります。
- 5) 腫瘍内科、緩和ケアチームと密接に連絡をとりあい、漢方治療などの補完医療も取り入れ、質の高いケアを提供します。

乳腺外科

担当医

○小田 直文(乳腺外科部長)

認定資格：日本外科学会外科専門医／日本乳癌学会乳腺専門医・指導医／検診マンモグラフィー読影認定医(AS評価) 乳房超音波医師講習(A判定)／医学博士／臨床研修指導医／日本乳房オンコプラスチックサージャリー学会乳房エキスパンダー・インプラント責任医師／HBOCコンソーシアム教育セミナー受講

○裕野 孝治

認定資格：日本外科学会外科専門医／日本消化器外科学会認定医／臨床研修指導医／堺市難病指定医

活動報告

昨年度の展望で挙げた通り、一名の検査技師が日本乳がん検診精度管理中央機構の技師講習を受講しました。講習後の試験にも合格し、乳房超音波検査を任せられる技師が、耳原総合病院に誕生しました。また、外来診療の一部になりますが、術前化学療法でステージⅡ以上のトリプルネガティブ乳癌に対する「免疫チェックポイント阻害剤(Pembrolizumab)」を導入しました。これまで、3名の患者さんに投与を行い、手術後の評価ではすべてpCR(完全奏功)と非常に良好な成績となっています。乳癌領域では今後も新規薬剤の登場が期待されています。一方で手術件数が69件から50件まで減少しました。一昨年がCOVID-19による受診抑制の反動なのか、昨年当院で診断され、他院で治療を希望された患者が多かったためか、検診受診者(当院健診科・堺市乳がん検診ともに)が減少したためか、あるいは、紹介患者さんが減少しているためか、結論は出ていません。いずれにしても、複合的な要素の結果であると考えられます。

今後の展望と課題

上記に記載した超音波技師の休暇や突然の熱発などの時に、交代要員として、複数名の技師育成が急務となっています。現在、もう1名の技師を育成中です。また、薬剤に関しては、TrastuzumabとPembrolizumabの合剤で、皮下注射剤の「フェスゴ」、Pegfilgrastimの「ジールスタ ボディーポッド」、本邦初のAKT阻害剤である「トルカブ」が当院で使用できない状況(未採用)です。これは、がん拠点病院として地域のニーズに応えきれていないことに他なりません。投与時間が短縮される「フェスゴ」や、通院頻度が減る「ジール

スタボディーボッド」は「time toxicity」の軽減に役立ち、働きながら治療する、がん患者の多様なニーズに応えることもできます。また、がん診療連携拠点病院の指定要件に「外来初診時から治療開始までを目途に、がん患者及びその家族が必ず一度は相談支援センターを訪問(必ずしも具体的な相談を伴わない、場所等の確認も含む)することができる体制を整備すること。」とあります。MSWや外来看護師長と相談しながら、問診時に質問票などが配布できないか、検討しています。

● 腎・透析センター(腎臓内科・透析)

担当医

○大矢 麻耶(腎・透析センター長 兼 腎臓内科部長)

認定資格：日本内科学会総合内科専門医・指導医／日本腎臓学会認定腎臓専門医・指導医／臨床研修指導医／堺市身体障害者福祉法指定医師(腎臓機能障害)／堺市難病指定医

○植田祐美子(腎臓内科医長)

認定資格：日本内科学会総合内科専門医・指導医／日本腎臓学会認定腎臓専門医・指導医／日本フットケア学会認定フットケア指導士／臨床研修指導医／堺市身体障害者福祉法指定医師(腎臓機能障害)／堺市難病指定医

○坂野 恵里

認定資格：日本泌尿器科学会専門医・指導医／日本透析医学会専門医／日本がん治療認定医機構がん治療認定医／日本旅行医学会認定医

○三世川宗一郎

所属学会：日本内科学会／日本腎臓学会／透析医学会

活動報告

今年は、新たに二人の医師加入にて、体制強化となった。腎症、急性腎不全、末期腎不全、透析患者の入院など、多数の入院対応を行えた。

透析については、シャント管理が充実でき、シャントPTAが増えてきている。早期発見、早期治療で閉塞することが減ってきた。また、腹膜透析も術者を新しく迎え、新たな導入患者さんも増えてきており、手技の充実が図れた。今後、より一層の腹膜透析の拡大を検討中である。

また1年を通して、透析終末期へこだわりたいと活動してきた。患者さん本人が望む最期に応えたいと急性期病院でありながら、長年の関わり、また在宅部門をもつ強みを生かし、家で最期を、という方には自宅看取りを、と実現できたことが多かった。

今後の展望と課題

今後も腹膜透析を初め、透析治療の充実、手技の充実には力をいれていく。

また透析スタッフ全員の力で透析生活への充実、満足度をあげていく取り組みを一層していきたい。

● 代謝・膠原病内科

担当医

○川口 真弓(代謝・膠原病内科部長)

認定資格：日本内科学会総合内科専門医・指導医／日本糖尿病学会糖尿病専門医・指導医／臨床研修指導医／リウマチ登録医／堺市身体障害者福祉法指定医師(肢体不自由)／臨床研修指導医／堺市難病指定医

○岩崎 桂子(代謝・膠原病内科医長)

認定資格：日本内科学会認定内科医／臨床研修指導医

○林 萌乃果

認定資格：日本内科学会内科専門医

活動報告

関連が強い腎臓病グループと同じ病棟でチームとしてカンファレンス・回診を行い研修医の教育も行なっています。開業医の先生方からの紹介も受け入れ、入院及び外来フォロー等で連携を進めています。

【糖尿病内科】

○2023年度診療内容

入院患者の加療

・教育入院11日間、月に3回に変更(COVID-19流行に伴い中止期間もあり)

- ・糖尿病を基礎疾患にもつ重症入院患者
- ・外科系の各診療科の内科マネージメント

外来患者の加療

- ・耳原総合病院 糖尿病紹介外来 母性内科(妊娠糖尿病を中心)外来
- ・サテライト診療所(高砂クリニック)での糖尿病外来
- ・堺北診療所の糖尿病外来
- ・南大阪糖尿病協会糖尿病ウォークラリー共催(去年は中止)

【膠原病内科】

- ・初発の関節リウマチ、他血管炎など膠原病患者を研修医とともに診断、加療を行っています。また外来フォローも行なっています。
- ・膠原病を基礎疾患にもつ患者さんの感染症などでの入院時の対応も行なっています。

今後の展望と課題

初期、後期研修医もローテートで回ってくることが増え、カンファレンスも活気が出てきました。糖尿病診療のスキルを生かし急性疾患のみならず、慢性疾患を診ることのできるチーム医療を目指し、その楽しさを研修医の先生にも経験してもらえるような研修システムを作って行きたいと思います。

外来通院の妊婦さんの糖尿病、甲状腺治療を専門医がフォローし、安全な分娩につなげるため妊娠糖尿病外来を開設しています。外来部門との合同カンファレンスなどを通じて更なる連携を深めると共に開業医の先生との関わりも深めていくことで、多くの患者さんが安心して病気と付き合っていけるよう支えていきたいと思っています。

呼吸器外科

担当医

○佐藤 泰之(呼吸器外科部長)

認定資格：医学博士／日本外科学会外科専門医／日本消化器外科学会認定医／ICD(Infection Control Doctor)／臨床研修指導医／身体障害者福祉法指定医師(呼吸器機能障害)

活動報告

呼吸器外科の手術件数は、2019年度55件、2020年度は70件と増加しましたが、2021年度は55件と2022度はさらに42件と減少しました。しかし、手術枠制限や病棟閉鎖もなくなり今年度は48件と少しながら増加しています。内訳は、肺癌に対する肺葉切除術が18件(2022年度13件)、肺癌(9件)や肺転移(2件)などに対する肺部分切除術が12件(同15件)、気胸の手術が4件(同7件)、膿胸に対する手術が6件(同3件)、縦隔の手術が2件(同2件)、手掌多汗症に対する交感神経遮断術が2件(同2件)、その他4件(内1件は局所麻酔手術)となります。それら全身麻酔の全ての手術を完全鏡視下での胸腔鏡手術で行っており、緊急開胸例もなく安全な手術が行われています。なお、進行癌で肋骨3本の合併切除の必要性から開胸移行が1件あります。また、術後肺癰に対しての再手術が1例ありますが、他は問題となる術後合併症はなく、全例自宅退院となっています。

最近の特異な傾向としては、比較的早期で肺葉切除さえできれば肺癌を根治できる状況ながら、あまりに呼吸機能が悪いがために部分切除しかできない症例やそれすらできない症例が目立っていました。

総括としては、手術の要としたところの肺癌に対する肺葉切除術が再増加したこともあり、今後も継続した増加傾向を期待したいと思います。引き続き手術助手については非常勤の呼吸器外科医による応援があり、安全かつ手術時間の短縮が実現できています。

今後の展望と課題

現在の手術枠や助手体制の中で安全かつ適切な手術を行う上では、手術件数は2020年度(70件)くらいが最大限かと思われます。そこまでの回復が当面の目標ではありますが、それには準緊急手術に関しての手術枠や手術助手を考えていかないといけないと思われます。

小児科

担当医

○藤井 建一(小児科部長)

認定資格：日本小児科学会小児科専門医・指導医／臨床研修指導医／堺小児科医会理事／堺市難病指定医

○瀬戸 司(小児科医長)

認定資格：日本小児科学会小児科専門医／臨床研修指導医

○瀬邊 翠

認定資格：日本小児科学会小児科専門医／臨床研修指導医

○阿曾沼良太

認定資格：日本小児科学会小児科専門医／JPLS小児診療初期対応コース修了／NCPR Aコース修了

○佐藤結衣子

認定資格：日本小児科学会小児科専門医／臨床研修指導医

○安田のぞみ

認定資格：日本小児科学会小児科専門医

○五嶋 領(～2023.5)

所属学会：日本小児科学会／日本小児神経学会

○橘 文佳(後期研修医)(～2023.9)

活動報告

小児科常勤医師体制としては、4月からは昨年度と同じ医師体制で始まりましたが、5月に1名退職となりました。9階病棟は、2020年7月より、小児科・整形外科・内科との混合病棟(33床)で運営していますが、小児の入院患者数については、今年度もコロナ前の3～4割程度と伸び悩んでいます。各種ワクチンの普及や感染予防の習慣が定着して、感染症による入院が明らかに減少しています。また、7年前から始めた重症心身障害児者のレスパイト入院(スマイルケア入院)も、コロナの影響で、今年度も1日1名に制限しての受け入れで始まりましたが、8月からは1日2名に拡大し、希望にお応えしています。今後は、1日4名枠まで拡大する予定です。

6階の産婦人科病棟では、2020年7月よりNICU(新生児集中治療室)を3床開設し、当院出生の新生児を状態が悪化する前に治療介入して対応しています。

出産数については、月に65名前後と昨年同様高い水準を維持しており、24時間体制で新生児医療には力を入れています。また、初期研修医の小児科研修も常時2～3名受け入れており、病棟医療を中心に研修指導しています。

救急対応としては、救急車や開業医・急病診からの紹介については、24時間365日受け入れ態勢を整備して、地域の小児救急に少しでも役立てるように対応しています。また、土日祝日の午後(13～17時)の時間帯については、電話での確認が前提で、一般の救急患者の診療も実施しています。

今後の展望と課題

この4年間のコロナ感染症の影響は甚大で、特に小児の入院については大きな影響を受けました。また、コロナの影響だけではなく、ワクチンや外来治療の発展で感染症や喘息等での入院が減少していることもあります。小児科病棟としては、アレルギー負荷テストやレスパイト入院等の予約入院を増やす方向で小児病棟を維持する方針としています。開業医の先生方からのご紹介は積極的に受け入れていく方針としていますので、お気軽にご紹介いただきたいと思います。地域連携室の方へ是非ご相談ください。また、レスパイト入院につき、2023年8月から、1日2名に増員して受け入れを維持していますが、今後、1日4名まで定員を増やしていく予定としています。外来としては、365日24時間、地域の子どもたちに対応できる様な救急外来を目指して、体制作りを進めていく方針です。

2023年度 小児科 疾患別統計

小児科入院数	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	総計
2023年度	52	67	70	68	66	37	50	43	56	56	43	75	683

2023年度 上位疾患

疾患名	件数
妊娠期間短縮、低出産体重に関する障害	132
急性気管支炎、急性細気管支炎、下気道感染症	66
食物アレルギー	64
てんかん	64
上気道炎	52
喘息	34
その他の感染症(真菌を除く)	32
インフルエンザ、ウイルス性肺炎	30
ウイルス性腸炎	26
肺炎等	22

周産期ファミリーセンターおよび産婦人科

担当医

○坂本 能基(副院長 兼 診療部長 兼 周産期ファミリーケアセンター長 兼 産婦人科部長)

認定資格：日本産科婦人科学会産婦人科専門医・指導医／日本産科婦人科内視鏡学会腹腔鏡技術認定医／日本女性医学学会認定女性ヘルスケア専門医・指導医／日本東洋医学会漢方専門医／母体保護法指定医／日本がん治療認定医機構がん治療認定医／臨床研修指導医／堺市難病指定医

○松岡 智史(産婦人科医長)(～2023.5)

認定資格：日本産科婦人科学会産婦人科専門医・指導医／日本婦人科腫瘍学会婦人科腫瘍専門医／日本産科婦人科内視鏡学会技術認定医／日本がん治療認定医機構がん治療認定医／日本周産期・新生児医学会新生児蘇生法専門コース(Aコース)修了

○下向 麻由(産婦人科医長)

認定資格：日本産科婦人科学会産婦人科専門医・指導医／日本産科婦人科内視鏡学会腹腔鏡技術認定医／日本内視鏡外科学会産婦人科技術認定医／日本がん治療認定医機構がん治療認定医／手術支援ロボットda Vinci術者認定／臨床研修指導医

○高木 力(産婦人科医長)

認定資格：日本産科婦人科学会産婦人科専門医／手術支援ロボットda Vinci 助手認定／母体保護法指定医／臨床研修指導医

○瀧口 義弘

認定資格：日本産科婦人科学会産婦人科専門医／母体保護法指定医師

○松原 侑子

認定資格：日本産科婦人科学会産婦人科専門医／臨床研修指導医

○黒部 貴子(後期研修医)

○内田 学

認定資格：日本産科婦人科学会産婦人科専門医／麻酔科標榜医／日本乳がん検診精度管理中央機構マンモグラフィ読影認定医／堺市身体障害者福祉法指定医師(小腸機能障害)(膀胱又は直腸機能障害)

活動報告

《産科》 妊婦から見た当院の魅力である以下の点を特に意識して取り組みました。

- ・総合病院であり、安全、安心、信頼がある
帝王切開率は一般病院と比較して低いが、新生児仮死が少なく、安全・安心・信頼のお産を実現できている
無痛分娩を安全に管理出来るように、ガイドライン安全基準を満たしている
超緊急帝王切開・母体救命処置法・新生児蘇生処置法を訓練し、実施できている
NICUが設備され運営されている
- ・分娩費が他院と比較して安く、良心的である
分娩一時金内に分娩費用を設定
- ・母子同室 全室個室化(差額室料は無料)
家族のふれあいの実現が達成できている⇒新型コロナウイルス感染防止対策で制限
休養をとりやすい環境を提供できている
- ・立ち会い分娩 陣痛期、分娩期を通して、家族とともに過ごせる環境づくり⇒新型コロナウイルス感染防止対策で

制限

- ・小児科との連携強化

《婦人科》 婦人科3分野、腫瘍、内分泌、ウィメンズヘルスケアを網羅している

- ・腫瘍

がん：婦人科がん全ての癌手術が可能。放射線療法は他院と連携

内視鏡下手術(腹腔鏡・子宮鏡)：婦人科手術の約60%は鏡視下手術

- ・不妊症は保険適応内診療が可能

- ・ウィメンズヘルスケア 専門医による診療

女性心身症、更年期障害、適応障害、不安障害、産後うつ病、骨粗鬆症

婦人科内分泌学、心身医学、東洋医学をバランス良くミックスし、幅広い治療を行っている

今後の展望と課題

- ・医療の質をさらに高める努力をします。

LSC、V-Path-laparosurgery、MEAを導入しました

ロボット手術を導入しました

- ・新たな命の誕生を祝福できる環境の整備を継続します。

- ・医師・助産師・看護師の数・質ともに向上させます。

泌尿器科

担当医

○田原 秀男(がん支援センター長 兼 泌尿器科部長)

認定資格：日本泌尿器科学会泌尿器科専門医・指導医／日本がん治療認定医機構がん治療認定医／堺市身体障害者福祉法指定医師(膀胱又は直腸機能障害)／医学博士／堺市難病指定医

○松村 直紀(泌尿器科医長)

認定資格：日本泌尿器科学会泌尿器科専門医・指導医／日本腎臓学会腎臓専門医／日本がん治療認定医機構がん治療認定医／手術支援ロボットda Vinci術者認定／堺市身体障害者福祉法指定医師(膀胱又は直腸機能障害)

○吉田 和裕

認定資格：日本泌尿器科学会泌尿器科専門医／手術支援ロボットda Vinci助手認定

○藤本 西蔵

所属学会：日本泌尿器科学会

活動報告

2023年の総手術件数は522件と増加した。3人から4人体制になったことで、並列手術が可能になり、効率良く手術を回せた事にあると考えられる。手術の詳細としては全体的に増加している傾向にある。

排尿障害治療においては、経尿道的水蒸気治療(Rezūm)にも一時的に取り入れ、今後超高齢者の前立腺肥大による排尿障害治療に活躍する治療も経験した。膀胱全摘除術や前立腺全摘除術は開腹で行っているが、近い将来に手術支援ロボットシステム(da Vinci)が導入される。よって現在以上の低侵襲手術が可能になることを期待している。

今後の展望と課題

- ・泌尿器科医4人体制の維持。

- ・ロボット支援手術器具の購入。

整形外科

担当医

○河原林正敏(病院長)

認定資格：日本整形外科学会整形外科専門医／臨床研修指導医／堺市身体障害者福祉法指定医師(肢体不自由)／堺市難病指定医

○吉岡 篤志(整形外科部長)

認定資格：日本整形外科学会整形外科専門医／臨床研修指導医／堺市難病指定医

○小松 俊介

認定資格：臨床研修指導医

所属学会：日本整形外科学会／中部日本整形外科災害外科学会／北海道整形災害外科学会

○芝 沙羅(後期研修医)

所属学会：日本整形外科学会

活動報告

- ・当院整形外科では、骨折を主とした外傷の手術に加え、脊椎手術や人工関節置換術にも力を入れています。脊椎の手術は、大半の症例を顕微鏡視下で行っております。人工関節置換術には侵襲の少ないアプローチ法を導入しております。治療を受けられる患者さんの身体への負担を極力減らすべく、当科では低侵襲手術の実践に引き続き取り組んでいきます。
- ・高齢化・併存疾患の重症化に伴い、近年は手術リスクの高い患者さんが増加しております。麻酔科、内科、循環器内科と連携し、必要時には他科との合同カンファレンス、他職種を含めた倫理カンファレンス等を行い、患者さんにとってより良い治療を提案しております。
- ・2023年度の総手術件数は419件、脊椎手術は120件、人工関節手術は45件でした。

今後の展望と課題

他院所との連携を行い、より患者さんにやさしい医療・手技を進め、整形外科診療のさらなるレベルアップを図っていきたいと考えます。

脳神経外科

担当医

○田中 禎之(脳神経外科部長)

認定資格：医学博士／日本脳神経外科学会脳神経外科専門医／日本脳神経外科学会近畿支部学術評議員／日本脳卒中学会脳卒中専門医・指導医／日本救急医学会認定ICLS・BLSコースディレクター／日本救急医学会・日本神経救急学会認定ISLSディレクター／臨床研修指導医／共用試験医学系OSCE評価認定講習会修了／回復期リハビリテーション専従医研修会修了／堺市身体障害者福祉法指定医師(肢体不自由)

活動報告

- 2023年4月23日：第4回みみはらISLS-WSコース 開催
- 2023年4月23日：第5回みみはらISLSコース 開催
- 2023年6月8日：てんかん講演「てんかん領域における診断と治療」
- 2023年6月16日：てんかん講演「てんかん重積発作アルゴリズム」
- 2023年8月27日：第84回耳原総合病院二次救命処置コース 開催
- 2024年1月23日：てんかん診療セミナーin南大阪 座長

今後の展望と課題

- 急性期病院ならびに開業医と連携をはかり、紹介・逆紹介患者数を増やします。
- 脳外科連携病院に、緊急治療が必要な患者さんを速やかに紹介します。
- 将来を見据え脳神経外科専門医、脳血管内治療専門医、脳卒中認定医を積極的に募集します。
- 脳神経外科専門医を獲得できれば手術を開始します。
- 脳血管内治療専門医を獲得できれば脳血管内治療を開始します。
- 脳卒中認定医を獲得できれば一次脳卒中センター(PSC)を申請します。
- 複数名のスタッフが揃えばSCUを設置、24時間体制で脳卒中急性期治療を行います。

リハビリテーション科

担当医

○田中 禎之(脳神経外科部長)

認定資格：医学博士／日本脳神経外科学会脳神経外科専門医／日本脳神経外科学会近畿支部学術評議員／日本脳卒中学会脳卒中専門医・指導医／日本救急医学会認定ICLS・BLSコースディレクター／日本救急医学会・日本神経救急学会認定ISLSディレクター／臨床研修指導医／共用試験医学系OSCE評価認定講習会修了／回復期リハビリテーション専従医研修会修了／堺市身体障害者福祉法指定医師(肢体不自由)

活動報告

【総スタッフ数】理学療法士33名、作業療法士16名、言語聴覚士10名

【入院からリハ処方までの日数】平均1.1日 2日以内の処方割合92%

【回復期リハビリ病棟】50床

【回リハ専従スタッフ数】理学療法士16名、作業療法士7名、言語聴覚士2名

【回リハ平均提供単位数】4.97単位(脳血管疾患6.1 運動器4.1 廃用4.1)

【回リハ平均在院日数】56日

【在宅復帰率】95%

【実績指数】平均51.1点

ICUの超急性期から一般病棟、回復期リハ病棟、緩和ケアと多方面にリハビリを提供しています。

複数の心臓リハビリテーション指導士による心臓リハビリを提供しています。

呼吸療法認定士による呼吸リハなど専門分野に取り組んでいます。

がんリハビリテーションにも取り組んでおり、研修に8名参加しました。

一般病棟では認知症・せん妄対策にチームで取り組んでいます。

透析リハビリテーションにも多職種で取り組んでいます。

地域保健予防活動として月に1回体操教室を開催しています。

今後の展望と課題

2025年問題に向け、今後益々回復期リハビリ病棟の需要が高まると考えられます。

回復期リハビリ病棟では、提供単位数確保のため休日リハビリを継続していきます。

術前呼吸器リハビリテーションが開始され、さらに多くの患者さんに介入していきます。

患者さんに必要なリハビリ単位数を受けて頂くために、さらにスタッフの増員に取り組めます。

脳外科専門医としてスタッフを教育・指導し、質の高いリハビリ医療の提供を目指します。

緩和ケア科

担当医

○末田 早苗(緩和ケア科部長)

認定資格：日本内科学会認定内科医／日本血液学会専門医／日本緩和医療学会認定医／日本がん治療認定医機構がん治療認定医／緩和ケア指導者研修会修了

○広川恵寿輝

認定資格：日本内科学会内科専門医／緩和ケア研修会修了

○大竹 典子(非常勤)

活動報告

・医師1名が2023年6月から産休・育休に入り医師体制が常勤1名＋非常勤1名の体制となった。苦しい医師体制の中、入院希望があれば迅速に対応する方針を継続した。特に在宅施設からの依頼については早急に対応した。

・患者家族の支援目的のレスパイト入院の受け入れを開始した。

・緩和ケアチーム活動を強化した。関与している患者についてチーム内での情報共有を密に行い、病状に細

かく対応できるよう体制を整えた。

- ・緩和ケア病棟での面会制限をさらに緩和し、患者や家族の精神面でのサポートを実施した。
- ・緩和ケア科での研修を希望する他科専攻医の教育を継続した。
- ・堺市の他施設(がん拠点病院など)との連携を深めるべく、対外的な交流を積極的に行なった。

今後の展望と課題

- ・面談外来・症状緩和外来の実施日を増やし患者数の増加を図る。
- ・当院関連施設である在宅部門との連携を進める(定期的な勉強会、事例検討会などの機会を設ける)。
- ・緩和ケア科にローテートしてくる専攻医および2024年度に緩和ケア科に新しく入職される若手医師の教育を推し進め当院のがん診療の質を向上させる。
- ・病棟での面会制限の更なる緩和、イベントの復活を積極的に行う。

緩和病棟関連資料

	2019年度	2020年度	2021年度	2022年度	2023年度
入院患者数	379	317	303	299	329
延べ患者数	8,295	7,608	6,945	7,138	7,000
病床利用率	94%	87%	76%	78%	80%
平均在科日数	21.8日	24日	23.2日	23.7日	21.1日

紹介先のリストと紹介数

紹介元	入院件数	面談件数
院内・法人内	157	172
堺市立総合医療センター	51	170
近畿大学医学部付属病院	9	31
大阪労災病院	7	12
大阪国際がんセンター	6	21
急性期病院	5	16
清恵会病院	5	11
大阪市立大学附属病院		13
その他	77	82
合 計	317	528

持続オピオイド使用人数 218名
 持続鎮静使用人数 45名
 調節型鎮静使用人数 0名

入院してから1週間ごとの死亡数

	日数	死亡数
第1週	1～7	72
第2週	8～14	57
第3週	15～21	44
第4週	22～28	31
第5週	29～35	10
第6週	36～42	10
第7週	43～49	6
第8週	50～56	3
第9週	57～63	4
第10週	64～70	2
第11週	71～77	4
第12週	78～84	1
第13週	85～91	1
第14週	92～98	
第15週	99～105	1
第16週	106～112	
第17週	113～119	
第18週	120～126	
第19週	127～133	
第20週	134～140	1
第21週	140～147	
第22週	148～154	
合 計		247

緩和ケア研修会修了者 2023年7月現在 97名

緩和ケア科	末田 早苗	腫瘍内科	中江 史朗	脳神経外科	田中 禎之
緩和ケア科	広川恵寿輝	産婦人科	坂本 能基	精神科	森田 大樹
総合診療センター	藤本 卓司	産婦人科	内田 学	精神科	原澤 俊也
総合診療センター	松瀬 房子	産婦人科	高木 力	病理診断科	木野 茂生
総合診療センター	大矢 亮	産婦人科	瀧口 義弘	心臓血管外科	井上 剛裕
総合診療センター	藤本 翼	産婦人科	松原 侑子	心臓血管外科	金田 敏夫
総合診療センター	井上 剛	代謝・膠原病内科	川口 真弓	麻酔科	上原 圭司
総合診療センター	杉本 雪乃	代謝・膠原病内科	岩崎 桂子	麻酔科	杉山 円
総合診療センター	河村 裕美	代謝・膠原病内科	林 萌乃果	麻酔科	中村 佳世
総合診療センター	瀬戸 司	外科	山口 拓也	麻酔科	江尻加名子
総合診療センター	若林 美帆	外科	平林 邦昭	麻酔科	南方 綾
総合診療センター	山口 諒也	外科	外山 和隆	専攻医	池田 光穂
総合診療センター	河村 勇志	外科	吉川 健治	専攻医	後藤 泰裕
腎・透析センター	大矢 麻耶	外科	戸口 景介	専攻医	細谷 聖美
腎・透析センター	植田祐美子	外科	中川 朋	専攻医	大内 賢治
腎・透析センター	坂野 恵里	外科	今井 稔	専攻医	石田 哲朗
腎・透析センター	三世川宗一郎	外科	土居 桃子	専攻医	神山 雅喜
呼吸器内科	緒方 洋	外科	花川 傑	専攻医	中川友香梨
呼吸器外科	佐藤 泰之	乳腺外科	小田 直文	専攻医	有田 速人
整形外科	河原林正敏	乳腺外科	碓野 孝治	専攻医	八田 寛朗
整形外科	吉岡 篤志	循環器センター	石原 昭三	専攻医	吉田 和樹
整形外科	小松 俊介	循環器センター	具 滋樹	専攻医	渡部亮太郎
泌尿器科	田原 秀男	循環器センター	橋本 朋美	専攻医	西田 一晃
泌尿器科	松村 直紀	循環器センター	南里 直実	専攻医	田中 友樹
泌尿器科	藤本 西蔵	循環器センター	成田 亮紀	専攻医	深野耕太郎
消化器内科	岩谷 太平	歯科口腔外科	柳澤 高道	専攻医	橘 文佳
消化器内科	岡田 正博	歯科口腔外科	中川 典子	専攻医	黒部 貴子
消化器内科	松田 友彦	放射線科	岩本 卓也	研修医	足立 元
消化器内科	河村 智宏	小児科	藤井 建一	研修医	岡田あずさ
消化器内科	櫻井 史歩	小児科	阿曾沼良太	研修医	藤井厚一郎
消化器内科	池田 響	小児科	瀬邊 翠	研修医	大平原麗華
		小児科	佐藤結衣子	研修医	杉 義人
		小児科	安田のぞみ	研修医	森本 将梧

精神科

担当医

○森田 大樹(精神科部長)

認定資格：精神保健指定医／日本精神神経学会精神科専門医／日本総合病院精神医学会特定指導医／臨床研修指導医

○杉田 義郎(非常勤)

認定資格：精神保健指定医

○大野 草太(非常勤)

認定資格：精神保健指定医／日本精神神経学会精神科専門医

○原澤 俊也(非常勤)

活動報告

外来診療において、精神疾患全般の診療に当たりました。初診患者数は年間72人でした。受診年齢層は20代から高齢層まで幅広くなっています。対症症例としては、家庭内や職場内のストレス、トラブルが原因の神経症圏が最も多く、うつ病、続いて認知症圏、精神病の急性期や慢性期などでした。他の医療機関からの紹介患者も多く、年間48件ありました。

当院が総合病院である為、院内他科からの診療依頼も多く、コンサルテーション・リエゾン活動も活発に行いました。

また、当院のリエゾンチームには当科医師も加わっております。このため上述のような精神科医師への直接的な個別の診療依頼に応じる形だけではなく、せん妄の患者さんを中心にリエゾンチームとして依頼を受ける形もとっております。この場合には「せん妄ラウンド」と称して、週に1回のラウンド(カルテラウンドを含む)を行いました。このラウンドは、1年を通して実地を継続できました。

また、一昨年からリエゾンチームだけでなく、①緩和ケアチーム(主に緩和ケア科との協働)、②母子ケアチーム(主に産婦人科や小児科との協働)の2チームにも新たに参加するようになりました。

更には、介護老人保健施設みみはらにも月1回往診を継続しました。入所されている方の精神症状が顕著となった場合の診察を主に実地しました。

今後の展望と課題

当院の精神科外来診療の特色で挙がるのは、「他科との併診」という形の多さです。これは、地域の精神科クリニックとは異なり、当院が総合病院であることを反映しているものと考えられます。つまり、「当院や法人内診療所で他科も受診している患者さん」の当科受診希望に対応していくことは、地域のニーズに応えるために欠かせないポイントであるため、今後も実践していく所存であります。

また、当科は病床を有しておりません。しかし他科入院中の患者さんが様々な精神症状を呈した際に、主治医や病棟スタッフと共にアプローチを講じていく、いわゆる「リエゾン・コンサルテーション」にも重点をおいております。「活動報告」でも述べた通り、精神科医師が個別に直接対応する形と、リエゾンチームとして対応する形、さらには緩和ケアチームや母子ケアチームとして対応する形を継続していきます。

老人保健施設みみはらへの定期的な往診は今後も継続していきます。

麻酔科

担当医

○近畿大学からの招聘医師(麻酔科部長)

認定資格：麻酔科標榜医／日本麻酔科学会麻酔科専門医・指導医／日本ペインクリニック学会専門医／臨床研修指導医

○杉山 円(麻酔科医長)

認定資格：麻酔科標榜医／日本麻酔科学会麻酔科専門医・指導医／日本専門医機構認定麻酔科専門医／日本心臓血管麻酔学会心臓血管麻酔専門医／日本医師会認定産業医／臨床研修指導医

○中村 佳世(麻酔科医長)

認定資格：麻酔科標榜医／日本麻酔科学会麻酔科指導医／日本専門医機構認定麻酔科専門医／新生児蘇生法(Aコース)修了

○江尻加名子(麻酔科医長)

認定資格：麻酔科標榜医／日本麻酔科学会麻酔科指導医／日本専門医機構認定麻酔科専門医／日本心臓血管麻酔学会心臓血管麻酔専門医／臨床研修指導医

○南方 綾

認定資格：麻酔科標榜医／日本麻酔科学会麻酔科専門医／日本小児麻酔学会小児麻酔認定医／日本周術期経食道心エコー認定医

活動報告

2023年度は総手術件数2,226件と前年度2,064件から増加、麻酔科管理症例は1,572件(全身麻酔1,427件、脊椎くも膜下麻酔31件、その他(無痛分娩など)114件)と前年度1,429件に比べ増加しました。その一方で並列麻酔を原則しない方針としたことや医員の産休等あり、非常勤医師に頼らざるをえない状況が続いています。

手術室の機器として、血ガス分析装置が更新され、結果が自動的に麻酔記録に反映されるようになり、手入力の負担がなくなり非常に助かっています。またFibCareが手術室に設置され、大量出血時に使用できたことで患者救命の一助となりました。2024年3月にはロボット支援下手術が開始されました。大きなトラブルなく初症例を終えています。

今後の展望と課題

2023年秋より原則、並列麻酔をしない方針としました。同時期に医員の産休も重なったため、外部人件費が増加しました。麻酔科収益を上げるためには、常勤医師の確保が必至です。2024年度は外科系診療科を挙げての全身麻酔件数の更なる増加を目標としています。今後、手術室の増室や年間全身麻酔件数2,000件を目標とすること、また麻酔科収益を上げていくためには、常勤麻酔科医および手術室スタッフの確保が急務かと思われます。

病理診断科

担当医

○木野 茂生(病理診断科部長)

認定資格：日本病理学会病理専門医・指導医／日本臨床細胞学会認定細胞診専門医／臨床研修指導医

活動報告

患者さんが病院に来られて、適切な治療を受けていただく為には、まず、適切な診断がなされることが必要です。その際に、しばしば「病理診断」が最終診断として大きな役割を果たしています。病理診断科の主な業務は 1. 細胞診断 2. 生検組織診断 3. 手術材料組織診断 4. 手術中迅速検査 5. 病理解剖の5つで、特に、がん死亡の2次3次予防について重要な役割を果たしています。

当科では、通常の染色や特殊染色に加え、一定の免疫組織化学的検索(50種以上)を自動免疫染色装置を活用し、正確な組織診断がなされる為の努力を行っています。さらに、診断に難渋する場合は、他施設の病理医を含めた検討や学会コンサルテーションなどの積極的活用を行っています。対象疾患は、内科系・外科系あるいは腫瘍・非腫瘍を問わず全ての疾患ということになります。特に、外科系であれば、消化器一般、呼吸器、婦人科、泌尿器の検体が多く、内科系では、肝生検、腎生検、皮膚生検、肺生検、骨髄生検をはじめ一般内科が取り扱う非腫瘍性病変全般も取り扱っています。また、各臓器の一般的な塗抹細胞診や吸引細胞診はもとより、細胞診断が重要な子宮がん、肺がん、膀胱がんなどのスクリーニング検査も行っています。

[主な検査機器]

1. 自動染色装置 2. 自動包埋装置 3. 自動尿標本作製装置 4. 自動免疫染色装置

[カンファレンス等]

毎週行われる乳腺外科、婦人科および呼吸器外科の術前術後カンファレンスには、病理医が直接参加し、総合的に患者さんの診断や治療方針に関する検討を行っています。また、解剖症例については、定例の院内臨床病理カンファレンス(CPC)を開催しています。

診断方法：

HE染色による病理組織診断、各種の特殊染色、酵素抗体染色による補助的組織診断。パパニコロウ染色およびギムザ染色による細胞診断、各種の特殊染色、酵素抗体染色による補助的細胞診断。セルブロック作製による診断。外注検査として、PDL-1、EGFR遺伝子変異解析、RAS-BRAF遺伝子変異解析、ROS-1、Her2/neu(FISH)やALK-IHC、MSI、蛍光抗体染色、フローサイトメトリーなどの検査を利用しています。

今後の展望と課題

新専門医制度に対応するべく、専門医研修病院としての要件を満たす為に、協力いただける基幹型研修病院である大阪公立大学、近畿大学との連携を早期に実現していくことが求められています。初期研修の中で、選択研修としての病理診断科での研修の必要性をアピールし、総合的な医師の育成に寄与していきたいと思っています。

一方、現在、受託を行っている院所については、診断についてのさらなる精度管理、迅速性を追求し、的確な病理診断を提供できるように、随時、努力していきたいと考えています。一方、一人病理医の欠点を補うための方策として①嘱託病理医との連携、②基幹型病院が行うカンファレンスへの参加、③病理学会コンサルテーションや近隣の病理医のコンサルテーションの積極的活用、④外部機関への免疫染色の依頼、⑤自動免疫染色装置の早期導入などを追求していきます。

また、現在参加している婦人科、乳腺外科、呼吸器科および一般外科系のカンファレンスのみならず、一般外科、消化器内視鏡部門や泌尿器科など他科のカンファレンスへの参加を具体化していく必要があります。

放射線科

担当医

○岩本 卓也(放射線科部長)

認定資格：日本医学放射線学会放射線診断専門医・指導医／日本IVR学会放射線カテーテル治療専門医・指導医

○三田 裕記(放射線科医長)

認定資格：日本医学放射線学会放射線診断専門医／日本IVR学会放射線カテーテル治療専門医

活動報告

2023度のCT、MRIおよびRIの総読影数は25,621件であり、翌診療日(翌々診療日)にはCT 73%(96%)、MRI 91%(99%)、RI 81%(99%)の所見の返却を達成している。またIVR件数は年間129件であり、シャントPTA、中心静脈ポート、TACEおよびCTガイド下ドレナージ等を中心に各科の依頼に対応している。またNBCAを使用した緊急止血術も行っている。

今後の展望と課題

和歌山県立医科大学放射線科と緊密に連携し、所属医師との遠隔読影システムの運用を行い、一層の所見時間の短縮や内容の充実を目指し、読影量の増加にも対応している。2023年度には診断専門医1名が着任し、読影およびIVRとも一層のレベルアップをめざしており、IVRではBRTOやUAEなども施行していく予定である。

組織健診科

担当医

○松浦 英夫(組織健診科部長)

認定資格：医学博士／社会医学系専門医・指導医／日本公衆衛生学会認定公衆衛生専門家／日本人間ドック・予防医療学会認定医・検診情報管理指導士／日本医師会認定産業医・スポーツ医／認知症サポート医／日本結核・非結核性抗酸菌症学会認定医／ICD(Infection Control Doctor)

活動報告

日本人間ドック・予防医療学会による「人間ドック健診施設機能評価」を受審し、学会が定めた全ての基準を満たしているとして更新認定を受けることができた。(審査日2023年9月14日、認定承認日2024年4月27日)

健診科は、保健師1名、看護師4名、事務10名という体制を整えました。受診には予約制をとりました。

健診受診者数は、人間ドックは2,579名(前年比97.8%)と昨年度より減少しました。しかし、特定健診2,072名(前年比108.9%)、がん検診32,858名(前年度比102.7%)は昨年度より増加しました。

健診後の保健指導の充実を図りました。具体的には、特定保健指導を行うとともに、人間ドック受診者に対しても保健指導を実施しました。健診実施日の保健指導実施率がそれぞれ25.5%、67.4%でした。

健診に携わっている職員全体のレベルアップと情報共有のため、月1回の運営会議、職場会議、全職種参加勉強会等を実施しました。また、安全安心して健診を受けて頂けるよう、健診前の手指消毒等々の感染予防策にも引き続き取り組みました。

情報発信としては、Instagram、フェイスブックといったSNSから健康情報等の発信を行いました。受診勧奨でもSNSを活用して5日前にお知らせメールを発信して予約忘れによる未受診防止に努めました。

今後の展望と課題

- ・国民の医療費が増大する中で、予防医療の重要性は増しています。受診者の視点に立って、質と満足度の高い健診事業を目指します。
- ・高砂クリニックとの役割分担を進めます。
- ・地域住民の健康増進とともに、地域で働く人々の健康への貢献を進めます。
- ・スタッフのレベルアップを目指します。
- ・サービスの充実を図ります。
- ・受診者数の向上を図ります。
- ・健診後のフォローアップ体制の充実を図ります。
- ・学術面では学会発表や論文作成に積極的に取り組みます。

歯科口腔外科

担当医

○柳澤 高道(歯科口腔外科部長)

認定資格：日本口腔外科学会専門医・指導医／日本口腔感染症学会院内感染対策認定医・インфекションコントロールドクター／臨床研修指導医／日本レーザー医学会安全教育講習修了

○中川 典子

認定資格：日本歯科放射線学会認定医

活動報告

2023年度は外来患者数は8,457名でそのうち初診患者は589名であった。入院患者件数は85名で全例が手術目的であった。さらに他院からの紹介患者数は285名と前年比0.97倍とわずかに減少した。また、耳原歯科診療所との連携については、歯科診療所からの紹介患者数は160名で、当院から歯科診療所への紹介依頼件数は159名と連携は概ね順調に推移した。

周術期口腔機能管理患者件数に関しては、周術期の初診患者数は1,308名で前年比1.03と微増した。そのうち手術患者が約90%を占め、癌化学療法および緩和ケア患者は約10%であった。退院時カンファレンス

(多職種連携)参加件数は149件で前年比1.41と増加した。

また、学会活動では論文は欧文1編、和文1編であった。なお学会発表では4学会合同学術大会(第43回日本歯科薬物療法学会・第36回日本口腔診断学会・第33回日本口腔内科学会・第32回日本口腔感染症学会)2023年9月23日(宇都宮)で大会長賞を受賞した。

今後の展望と課題

1. 令和6年度の診療報酬改定において、当科の診療の柱の1つである周術期等口腔機能管理に関し、領域や施行条件の拡大がされたり、回復期口腔機能管理が新設されたことから、厚労省に梯子を外されないように、かつ可能な範囲(Overworkにならない範囲)で業務拡大を図りたい。
2. 2024年度の当院の手術目標件数が1,500件と設定され、それに付随して当科の手術目標件数が120件(前年度比約1.3倍)と設定されたため、地域医療連携の強化により手術件数の増加に繋げたい。
3. 今回の診療報酬改定で周術期口腔機能管理の拡大領域(ICU・HCU)患者と回復期口腔機能管理患者は病棟往診での対応となるため、man power不足が大きな課題である。